

威信財としての近世陶磁器

Early-modern Ceramics as the Prestige Goods

森本伊知郎

はじめに

①献上品・贈答品としての陶磁器

②式正の饗宴・茶会に用いられた器

小結・展望

【論文要旨】

近世の江戸遺跡では、大名が贈答品や式正の饗宴の器として用いたとみられる陶磁器が少数ながら出土している。これらの陶磁器は、大名の威信を示す付加価値が高い器物のひとつと考えられる。本稿ではこれらの高級陶磁器について考古学的な検討を行った。

贈答品・献上品の陶磁器としては、鍋島藩窯製品と御庭焼があげられる。初期・盛期鍋島は大名屋敷から組物として出土する例が多い。一方、下級武士屋敷や町人地からも盛期・後期鍋島が単品で出土する場合がある。鍋島藩が下級武士や町人に藩窯製品を直接贈与したことは考えにくく、また、これらの遺跡で鍋島が廃棄された年代は18世紀中葉以降が大半であることから、下級武士屋敷や町人地から出土する鍋島は骨董品や質物として二次的に流通した可能性が考えられる。

式正の饗宴に用いられた器として、かわらけがある。17世紀中葉の遺構では、白木の膳、箸と共に大量のかわらけが一括廃棄された例があり、出土状況から將軍御成の饗宴に用いられたと考えられている。しかし、18世紀中葉以降になると無釉かわらけの出土は激減する。このことは、17世紀の將軍御成のような形式の饗宴があまり行われなくなった可能性を示すと共に、武家儀礼に用いられた食器構成の変化、つまり、式正料理から本膳料理への変化と対応する可能性が考えられる。

茶碗、茶入、水指などの茶道具は17世紀後葉頃までは一定量出土するが、18世紀以降には減少する。しかし、茶会記などからみると武家儀礼の一環としての茶会は18世紀以降も頻繁に行われていたと考えられる。ここでは、18世紀以降の茶会では、桃山期、江戸初期の古い伝来をもつ茶道具が重視され、伝世して用いられた可能性を指摘した。

江戸遺跡では、量産陶磁器の編年研究は多いが、高級陶磁器の考古学的研究は進展していない。しかし、近世における陶磁器に対する価値観や認識を明らかにするためには、出土数の少ない高級陶磁器についても出土状況に基づく検討を行うことが重要な課題と思われる。